

徳富蘇峰記念館 第31回特別展示目録

特別展 「手紙ってアートだ!!」展

美術展 「日本画の中のかわいい動物・生き物コレクション」展

展示期間 平成二六年一月七日(火)～十二月七日(日)

はじめに

徳富蘇峰記念館には、蘇峰が大切に保管した4万7千通余りの来簡(蘇峰宛ての手紙)が所蔵されています。これらの膨大な手紙は、毎年テーマに沿って開催される特別展で広く紹介され、昨年その特別展もついに無事三十回の節目を迎えることができました。

三十一回目となる本年の特別展では、これまでと少し趣向や見方を変えて、書簡が持つ独特の“美”や“風合い”“アート性”に焦点を当てました。

「手紙はアートである」という切り口により、書家をはじめ、政治家、軍人、実業家、芸術家、文筆家、ジャーナリズム関係者など、各界を代表する筆の達人たちの書簡を選びすぐり展示いたしました。その筆は毛筆、万年筆、鉛筆、絵筆と当然のことながら多岐にわたっています。書を愛した蘇峰が好んで使った「書は人なり」の言葉にも通じるような、読み手の心に響き、魅了して止まなかったであろう手紙や絵手紙の数々をお楽しみください。

また同時開催の美術展では、日本画や墨絵を愛した蘇峰のコレクションを紹介いたします。蘇峰は多くの作家に画賛を求められました。蘇峰の賛が入ることでの画の価値が格段に上がったというのがその理由ですが、そうした依頼にも丁寧に応えることで蒐集品も増えたようです。そのコレクションの中から、今回は「動物」や「生き物」が登場するかわいい日本画を特集いたしました。今年が午(うま)年(どし)ということもあり、馬の絵も複数展示しております。その“毛色”の違いにもご注目いただければと思います。

なつめ そうせき
夏目漱石 一八六七～一九一六(慶応三～大正五) 東京生まれ

小説家、評論家、英文学者。本名、金之助、俳号は愚陀仏。大学時代に正岡子規と出会い、俳句を学ぶ。帝国大学(現在の東京大学)英文科卒業後、松山で愛媛県尋常中学校教師、熊本で第五高等学校教授などを務めた。国費でイギリスへ留学。帰国後、東京帝国大学講師として英文学を講じながら、『吾輩は猫である』を雑誌『ホトトギス』に発表。その後『坊っちゃん』『倫敦塔』などを書く。朝日新聞社に入社し創作に専念、『虞美人草』『三四郎』などを掲載した。「修善寺の大患」後は、『行人』『ころろ』『硝子戸の中』などを次々と執筆。「則天去私(そくてんきよし)」の境地に達したといわれる。晩年は胃潰瘍に悩まされ、『明暗』が絶筆となった。

明治四十二年、蘇峰は五山版『百人一首』を写真版で「民友社」より三百部公刊した(京都五山の優れた百人の僧の詩を、横山景三和尚が撰したもの)。蘇峰はこの本を高濱虚子を通じ、漱石に進呈した。この漱石の筆による書簡はその礼状で、手紙の用紙は巻紙ではなく、漱石山房の原稿用紙が使われている。生涯で多くの書簡を残した漱石だが、この原稿用紙を使ったものは少ない。橋口五葉デザインによる漱石山房の原稿用紙は明治四十一年より用いられた。文中には五山の僧の漢詩が引用され、漢詩好きな漱石の一面が垣間見える。

「日常お忙しい中このような風流な仕事に月日をお使いの御余裕羨ましい。私は俗用に追われ、静かに遥か未来を思いやることさえもできない。和尚の一首を挙げて、復刻本を実行なさった貴方への感謝の辞にかえます。」という内容。

◆展示書簡 明治四十二年二月九日付 墨書

拝啓 御刊行の横川和尚撰五山百人一首 二百部のうち第百五十号先日高濱虚子の手より正に落掌 難有御礼中上候 日常御多忙の折 這般の風流に閑日月を弄せられ候御余裕 羨敷限に候 正是雪村老漢の饅湯炉炭起清風の一句に相当するものと存候 頃日机辺に集積する所の書巻は悉く生存競争の臭味有之 久振にて此好事の雅集に接し 晒懐頓に一碗の苦茗を喫したるの感有之 たゞ俗用蝸集静かに緬痘の趣を致す能はず 王碗和尚の軒前修竹縁袞婆玉立三竿不用多好是満山風雨夜 庫心相对亦他無の一首を挙げて感謝の辞に代へ申候 草々 頓首

二月九日


夏目金之助

蘇峯先生 侍史

(注) 封筒表 京橋区日吉町四 国民新聞社 徳富猪一郎様
封筒裏 牛込早稲田南町七 夏目金之助

森 鷗外 もり おうがい 一八六二〜一九二二(文久二〜大正十一) 島根県津和野生まれ

明治・大正時代の作家・軍医・評論家。東大卒業後、軍医となりドイツに留学。明治二十三年、蘇峯が創刊した『国民之友』で『舞姫』を発表し文壇にデビューした。明治四十年陸軍軍医総監となる。翻訳・評論・創作・文芸誌刊行などの多彩な文学活動を展開。晩年は帝室博物館長。代表作は翻訳「於母影」「即興詩人」、小説「舞姫」「牛タ・セクスアリス」「阿部一族」「高瀬舟」など。
蘇峯は『舞姫』の原稿を鷗外から直に受け取り、読んだのち「実に其の筆力の非凡なるを嗟嘆した」と述べている。

「昨日早朝投函した『批評家の秘訣』と題する一篇が今日(国民新聞に)掲載されていらない」と憤った内容の手紙。自分の原稿を「ツマラヌ者」としながらも、「没書」にするならその理由を教えて欲しいと、憤慨した様子である。

この鷗外の原稿は九月三十日(翌日)の『国民新聞』に「批評の大秘訣(二十七日投寄)」というタイトルで無事掲載されている。


◆ 展示書簡 明治二十三年九月二十九日付 墨書

拝啓 一昨日早朝差出シ候批評家ノ秘訣ナル一篇 余リツマラヌ者ニ候ヘトモイサヽ力解嘲ノ意味モ有之候ヒシニ 今ニ御掲載無之 果シテ御没書ニ相成候モノニヤ 右午御手数数御報 煩シ度候也 早々不乙
九月廿九日 森 林太郎
徳富猪一郎様 侍史

(注) 封筒表 京橋区日吉町四番地 国民新聞社 徳富猪一郎様 侍史
封筒裏 下谷区上野花園町 森林太郎

岡本 かの子 一八八九〜一九三九(明治二十二〜昭和十四)東京生まれ

大正、昭和期の小説家、歌人、仏教研究者。本名カノ。跡見女学校卒業。漫画家岡本一平と結婚し、芸術家岡本太郎を生んだ。小説家として実質的にデビューしたのは晩年であったが、生前の精力的な執筆活動から、死後多くの遺作が発表された。耽美妖艶の作風を特徴とする。

 流れるような筆運びの美しい手紙。昭和十二年に出版されたかの子の『女性の書』に対して、蘇峯は一月十六日の東京日日新聞「日日だより」において次の様な書評を書いている。

「教養ある女性の著作は、我等には特殊の興味を寄与するものが少なくない。」
展示されているかの子の手紙は、蘇峯の書評に対する少々遅れ気味の礼状である。

◆ 展示書簡 昭和十二年七月十三日付

御機げむうるはしくおらせられ かげながら嬉しく存じあげをります さて今年のはじめ日々新聞にて拙著女性の書にあまさずばかりの御讃め言葉をたまはりありかたく 早速参上 御禮申述べたくぞんじをりながら 御尊用を御邪魔いたすもとさしひかへられつ御無沙汰にうちすぎをりました 今日べつにおめにかけます粗品 却つて御はずかしきばかりのもので御座いますが何とぞ御納め下され度 伏して御願ひ申上げます
七月十三日 岡本かの子
徳富蘇峯先生 みもとに

(注) 封筒表 大森区山王一の二八三二 徳富蘇峯先生
封筒裏 七月 十三日 赤坂区青山高樹町 岡本かの子

九条 武子 くじょう たけこ 一八八七〜一九二八(明治二十〜昭和三) 京都生まれ

教育者・歌人。西本願寺法主・大谷光尊の次女。兄はシルクロード探検で有名な大谷光瑞。男爵九条良致に嫁ぎ、夫に同伴して渡欧、翌年ひとり帰国して十余年夫の帰朝を待つ。和歌を佐佐木信綱に、絵を上村松園に学ぶ。夫の帰国後、東京築地本願寺内に移り住み、関東大震災に自らも罹災しながら被災者の救済に挺

身、慈善事業につとめ、また仏教主義に基づき京都女子専門学校(京都女子大学の前身)を創設するなど女子教育にも尽力した。『金鈴』『無憂華』などの歌集がある。

赤い便箋と封筒を使用した美しい手紙。女性の書のお手本にしたいような華麗な筆使い。手紙は「23日に催される会に友達を誘って伺います」といった内容。

◆ 展示書簡 明治 年 月二十一日付

この間はご無事帰国いたしいろいろそのせつ御配慮おそれ入りまゐらせ候 来る二十三日の御もよほしにつきお仲間入りいたし候へとも 至つて不出来の段御ゆるし願上候、御あずかりの絹地のままにては誠にした々ねにくうぞむじ候間御ことわりなく勝手なこといたし何卒御ゆるし願上候 別紙はもしや女の文学にて絹の方御よみにくう候かとぞんじしたため入りおき候 さて御当日は二時半頃にともだち御さそひいたし御庭も拝見いたしたくかたがたまゐるつもりに御座候

乱筆ながら

かしこ

廿一日

武子

(注) 封筒表 徳富猪一郎様 おもとに

封筒裏 築地

北村 西望 きたむら せいぼう

一八八四〜一九八七(明治十七〜昭和六十二)長崎県南島原生まれ。

日本の彫刻家。代表作である大作「長崎平和祈念像」は有名。文化勲章、文化功労者顕彰、紺綬褒章受章。

国会議事堂中央広間には、議会政治の基礎を作るために功労のあつた板垣退助、大隈重信、伊藤博文の銅像がある。昭和十三年に大日本帝国憲法発布五十年を記念して作られたもので、板垣退助像を制作したのは西望だった。西望はその制作の過程において、板垣と交遊のあつた蘇峰にいろいろとアドバイスを求めた。展示書簡中では、完成した板垣像の写真を添えて、蘇峰の協力への感謝の気持ちを伝えている。

◆ 展示書簡 昭和十三年二月十三日付

拜啓 寒気厳敷御坐候折柄御障りも御坐なく被遊候哉 御伺い申上候

扱て先日は板垣伯銅像の件二付御多用之處種々御教示賜り誠二難有奉多謝候 漸く完成致し候まま(甚だ汗顔の次第ながら)写真別便にて一葉御目につけ

申候 参上致すべきに候へ共 却て御迷惑と存候間乍略儀書申上候 御許し申上度 如此御坐候 匆匆

昭和十三年二月十二日 北村西望

徳富先生 玉案下

(注) 封筒表 大森山王ノ二八三二 徳富猪一郎様

封筒裏 滝野川区西ヶ原七一 北村西望

釈 宗演 しゃく そうえん

一八六〇〜一九一九(安政六〜大正八) 若狭国生まれ。

明治から大正時代の臨済宗の僧。号は洪岳、楞伽窟など。俗名・常次郎。出家して釈と改姓。慶応義塾を卒業し、福澤諭吉や山岡鉄舟の勧めでセイロン(スリランカ)に留学、インド、タイ、中国を歴訪。鎌倉円覚寺、建長寺の管長を兼任し臨済宗大学(花園大学)の学長も務めた。明治二十六年、シカゴの第一回世界宗教会議に出席し、初めて欧米に禅を紹介。その後も鈴木大拙と共に世界に禅を喧伝した。蘇峰主宰の「碧巖会」の講師をつとめ、政、財界や夏目漱石ら知識人への講義・指導を通じて大正期の禅ブームを巻き起こした。

鎌倉の東慶寺から出された書簡は、管長制度廃止論者である宗演が、再び円覚寺の管長を押し付けられた苦痛を蘇峰に訴えている。「元来江湖一箇の殉道者を以て私に自ら任じ居候者」だが、管長を引き受けたからには、老体に鞭打って仕事をすつもりであるので「老兄亦外護御同情を垂れられん事」を願っている。

◆ 展示書簡 大正五年六月二十四日付

華翰難有拜見仕候。御来示の如く這回一般、野兔閑神の草廬を伺ふ所となり肉薄 懶眠を驚かされ候て終に一派の犠牲と相成り再び醜面皮を世上に暴さねばならぬ事と相成り真に忸怩之至に御坐候。老婦再嫁の一言吾兄同情の厚きに因らざれば、余人の口よりは聴く事を得ざる親言と存じ申候。今更申すも愚痴の至に候得共、納は元来江湖一箇の殉道者を以て私に自ら任じ居候者な

り。一方より云へは管長制度廃止論者に有之候。但々時氣機未到、凡衆不容予説ため快々今日に至り申候。然るに這回亦一派の情実には迫られ事茲に及び申候事乍自分如何にも腑甲斐なき奴つと存じ申候。乍併一たび點頭致し候上は佛祖へ報恩の為と存じ自ら驚骨に鞭ち直前勇往仕べくと決心仕候間、老兄亦外護御同情を垂れられん事、千折万撓の至に御坐候。右卑答得高慮度 草々如是に御坐候 謹言

(注) 封筒表 東京市青山南町六ノ三十 徳富蘇峯先生

封筒裏 六月廿四日 相州鎌倉山之内松ヶ岡東慶寺 釈宗演

池辺 三山 いけべ きんざん 一八六四〜一九二二(文久4〜大正一)肥後生まれ。

明治期のジャーナリスト。本名・吉太郎。日本のジャーナリストの先駆けといわれる。大阪朝日新聞、東京朝日新聞の主筆を歴任。朝日新聞隆盛の礎を築いたひとり。公明正大で高い識見の言論は政治や思想、文芸など多方面に影響を与え、陸羯南、徳富蘇峯とともに「明治の三大記者」と称された。『葉亭四迷』や『夏目漱石を朝日新聞に入社させ、今日「文豪」と言われる作家の長編小説を新聞に連載した。また、持ち前の温かい人柄により多くの人に慕われた。三山が漱石を朝日新聞に誘う際も、初対面にもかかわらず二人はすぐに意気投合。三山を信頼するに足る人物と直感した漱石は、朝日新聞で作家として歩む道を選んだといわれる。

◆ 展示書簡 明治()年七月二十三日付 墨書

拝啓 石河幹明君招請会本日午後五時半より日本倶楽部にて行はれ候筈 肝腎の老台二御通知漏れと相成居候様二存候 粗漏の罪御ゆるし可被下候 御繰合せ御来光奉希候

(注) 封筒表 国民新聞社 徳富猪一郎殿

封筒裏 池辺吉太郎

河井 仙郎 かわい せんろう 一八七二〜一九四五(明治四〜昭和二十) 京都生まれ。

近代日本の篆刻家。中国に渡り呉昌碩に師事し、金石学に基づく篆刻を日本に啓蒙しその発展に尽くした。本来、姓は川井であったが戸籍の記帳ミスから河井と

なる。呉昌碩が初代社長となつた西泠印社設立時の発起人の一人。

明治四十三年一月十四日の手紙は、国民新聞創刊二十周年を記念して開催された「維新志士遺墨展覧会」における記念スタンプのデザインを蘇峰に提案している内容である。手紙の中で印の案を丁寧に書き入れている。

◆ 展示書簡 明治四十三年一月十四日付 墨書

維新志士遺墨展覧會御企不堪欽佩候 紀念スタンプも時宜に適せし御趣向と奉存候 然るに其印中の□(く)にがまえに(儿王)ハ貴社に從來御使用のシルシに候哉 若し然らすとせハ今後は□(く)にがまえに(民)を御用の被成候てハ如何と奉存候 □(く)にがまえに(民)ハ東魏元象二年三級浮圖碑に見えし國の字の異文に御座候 或ハ國民の合字と見るも可なり決して小生私造の文字にハ無之候 鄙見にてハ貴社のシルシとして此に趣き候ものに無之歟と奉存候 右ハ豫々得貴意度存居候事に候へどもツイク機を失し居申候 本日御発表のスタンプを拝見し頗手後れと相成候へとも 兎二角愚見申上候餘拜晤萬々 仙郎頓首 十四日 蘇峯先生 函史

(注) 封筒表 赤坂区青山南町六ノ卅 徳富猪一郎様

封筒裏 東京麹区富士見町一之廿九 河井仙郎

岡倉 天心 おかぐら てんしん 一八六二〜一九一三(文久二〜大正二) 横浜生まれ。

思想家、文人、美術評論家。本名・寛三。急激な西洋化の荒波が押し寄せた明治という時代の中で、日本の伝統美術の優れた価値を認め、美術行政家、美術運動家として近代日本美術の発展に大きな功績を残した。日本画改革運動や古美術品の保存、東京美術学校の創立やボストン美術館中国・日本美術部長就任などが挙げられる。天心は、英文の著作『The Ideals of the East』、『The Book of Tea』などを通じ、東洋や日本の美術・文化を欧米に積極的に紹介するなど、国際的な視野に立つて活動した。

この手紙は、一九〇三(明治三十六)年、ロンドンで発刊された著書『The Ideals of the East』を一冊進呈するといった内容。書簡の中に書き込まれた本の英文タイ

トル名が見える。この『The Ideas of the East』は儒教、道教、仏教の歴史をたどり、それらを生んだ東洋の精神の偉大さを示し、その精神を保持するのが日本美術だとする天心の代表的著作である。「アジアは一つである」という冒頭の句は有名。

◆ 展示書簡 明治〇年五月二十九日付 墨書

拝啓 益御清〇恭賀之至奉存候 陳レハ拙著『The Ideas of the East』此程倫敦に於印刷致候 一部座右に進呈致候 御寸暇の節 御一覽御教示被下度 本懐に御坐候 勿々不一 五月廿九日 岡倉天心
徳富先生侍史

(注)封筒表 京橋区日吉町国民新聞社 徳富猪一郎様
封筒裏 東京市下谷区谷中初音町四丁目 日本美術院 岡倉天心

棟方 志功 むなかた しこう 一九〇三〜一九七五(明治三十六〜昭和五十) 青森県出身。

二十世紀の美術界を代表する世界的巨匠の一人。
昭和十七年以降、版画を「板画」と称し、木版の特徴を生かした作品を一貫して作り続けた。

鎌倉に住んだ棟方は、蘇峰の秘書・塩崎彦市と親しく交友し、夫人同伴で二宮の塩崎邸を幾度も訪れた。これらの絵手紙は、草津で湯治する塩崎に宛てたもので、デパートの包装紙やその場にあつた紙に書き付けられている。正に自由奔放で、棟方の飾ることのない親愛の情を感じ取れる。ざくろの実は、塩崎邸内(記念館横)にある樹齢三百年のざくろを描いたもの。

◆ 展示書簡 昭和四十五年七月四日付 沙羅双樹の花、蓮、沢瀉あせたがなどが描かれた

手紙

塩崎彦一先生侍史 棟方志功拝敬 長いながいありがたいお祥書に、接しました、御礼を直に重々と申し上げます。泰山木や、シヤナゲ、イチゴまた青梅等々この稚筆のおもむくままの色彩鮮やかな絵を添えての体心こもりましたお言葉うれしく何回も何回もチャコとともに拝しました。ゆたかに悠ことお体心を御保養しているありさまがよく判然いたしましたよろこび居りま。ゆつくりとゆつ

りとよろこばかりに名湯の利き目を得てのご帰館をよろたのしくお待ちしています。おんうちさまへおんよろしくによるしくに。

昭和四十五年七月四日 清農 印

山水楼大主人お惠敬による朱肉を使用して。。。

(注)封筒表 群馬県草津温泉草津館御在座 塩崎彦一先生 侍史
(拝礼信)

封筒裏 鎌倉市津二一八二の四 棟方志功拝

◆ 展示書簡 昭和 年 月 日付 (ざくろの絵入り絵手紙)

昭和〇年 秋

塩崎彦市先生 棟方志功拝

昨宵山水楼老主人来車されまして、二宮大人(塩崎彦一)が体重かなり減じたとかにても、このザクロを自ら樹に登って折ってくれしと、わたくしのところに土産してくださいました。あまり無理してあまり体重を減じすぎでは——と思ひ居ります。おじやましお目にかかつて存じましたが、かいつてお心つかれをかえてはチャコ(志功夫人)と話し居ります。くれぐれにもおんたい切。

◆ 展示書簡 昭和 年 七月 日付

塩崎彦市先生侍史 棟方志昂拝〇 草津温泉にお清養の程お体心には何よりと存じ上ます。くれぐれにもお健やかにもお丈夫であられますことを祈期してやみません。もう梅雨もあがつてさっぱりして参りました。夏にゆつくりとくつろぎのお静養をねがい上げます。またまたこの度は山どころ名産の数々の珍味、醜醐味、沢山々々ありがたく、おんころ一杯にこれを店で選びましたことが写真の様に浮かび上つて参ります。「これ、これとこれとまたこれとこれ」と店員の人のお命じになつている様子が判る様だと千哉子(チャコ)は今度千哉子になりました。わたくしも前から絵板画に使っていました志昂をこれからすべて使うことになりました。ほんとうにありがとうございました。先づ大好物のまたたびをいただきますしてとても美味しく夕飯がたのしみになりました。(わたくし家では夕飯が御飯にしています)これから追々とおんころもつた品々をいただきます。お元氣にて「草津よいと」一度はおいて・・・と手拭をお頭に乘せて歌ってくださいるように書きます。失礼な用紙、机の上にある何でも使うのがくせです。おゆるしくくださる様に。

(注)封筒表 群馬県草津温泉草津館御在座 塩崎彦一先生侍史(拝礼信)
封筒裏 鎌倉市津一一八二の四 棟方志功拝

◆達磨画 「鞍馬石もいゝ 貴船石もいゝ」

吉田 初三郎 よしだ はつさぶろう 一八八四〜一九五五(明治十七〜昭和三十)京都市生まれ。

京都市生まれ。大正から昭和にかけて活躍した鳥瞰図絵師。生涯において3千点以上の鳥瞰図を作成し、「大正の広重」と呼ばれた。十歳で友禅図案師に丁稚奉公し、二十五歳のとき鹿子木孟郎に師事して洋画を学ぶが、鹿子木のすすめで商業美術に転向する。大正三年、最初の鳥瞰図である『京阪電車御案内』が、修学旅行で京阪電車に乗られた皇太子時代の昭和天皇の賞賛を受ける。大正から昭和にかけての観光ブームにより、初三郎のもとには全国各地から鳥瞰図の依頼が寄せられた。

蘇峰が愛した山中湖の富士山を描いた美しい絵手紙。秘書の塩崎彦市宛。初三郎はこの手紙を書いた昭和二十年、熊本県佐敷にアトリエを構え、蘇峰からの要請で故郷・阿蘇の山を中心に描いた「阿蘇大観図」を作成した。画中の「双宜荘」そうぎせうは蘇峰の別荘名。下段は、水俣・湯の児温泉の平野家旅館からの絵手紙。

◆展示書簡 昭和二十年二月十七日付

謹啓 その後の御無沙汰御詫び申上候。かへりみれば昨夏涼風の山中湖畔こな屋楼上に一夕御懇の御清談を拝し、御高風今も尚まぶたにのこりて感銘常にあつたなるをおぼへ居り候

従別靈山峯既一年 一年心事附雲烟 月明今夜乾坤静 白頭相對共悠然

と蘇峰先生の御高吟かぎりなく御なつかしく存じ申候 小生やがて機を得れば日本中の蘇峰先生御愛好の地を後世へ画き残したき念願にて候 この後とも何分の御指導よろしく懇冀奉候 追て小生昨秋来水島の御詩碑及び菊池歴代御史跡図その他の用事にて西下 今尚旅窓筆陣をつづけ居り候 その内また水俣の風光など御たよりいたす可く候 末筆ながら蘇峰先生へよろしく御鳳声冀候 敬具 皇紀二千六百五年二月十七日 西肥芦北の僑居にて 初三郎

(注)封筒表 静岡県熱海市伊豆山町

徳富蘇峰先生御秘書塩崎彦一様御尊下
封筒裏 熊本県芦北郡佐敷町花岡西板床正臣方 吉田初三郎

◆展示書簡 昭和二十二年七月一日付

恭啓 連日の長雨 はるかに先生の御郷土より寸緒御便り申上候 小生このたび曾つて先生御来遊の湯の子温泉へまゐり申候

山連小嶼水如油 半日閑遊□百憂 浴罷楼頭無一事 翠螺浮處是岑州
とは春秋まさに二十年のむかし湯の子平野家に御宿泊当時の御即興 先生がこの宿の半日その御閑遊に百憂を□され候 御おもかけ今もなを楼頭依然夢うつくしき大風光に候 当楼主平野氏いよく健勝にて常に先生の御高德を尊崇戦時中の萬難を突破され今や新生日本が世界平和に貢献の第一線として観光湯の児進展に尽力かねて 先生御健筆御輝毫の奇勝楼大額を仰ぎまた昭和四年四月十日当楼上に於て先生御夫妻が窓外の景勝御賞観の御写真を大広間にかかげ歴史的なる当楼の誉れを幾千代かけて雲客と共に讃仰せられ居りさらに主人自室には先生の御肖像を奉掲のみならず特にころを尽くして手に入られし由の先生昨年御染筆の清浄心の御小品を立派に表装して壁上に敬仰の潔情を拝し初三郎の感激いよいよ深きを覚え申候 昨日当地にまいる途上自動車車窓より先生御祖先の御墓所を遙拝 また浜八幡老松を敬拝 曾て先生より御高囀を拝し候阿蘇大観図謹筆をかへりみて感慨更らにあらたなるかと覚へ申候 このたびはゆくりなく平野家主人の懇囑により当湯の児温泉景勝を執筆の事となり欣喜禁じがたくこの図やがて完成の上は絵はがきに縮刷発行の由にならば その内御高覧相仰ぐ日も候べきか この平野氏が郷土発展に尽さるる熱情こそはひとへに蘇峰先生が常に御郷土諸友への温たき御恵仁御高德の結実御訓化によるとところ景仰ひとしほの事に存じ入候 実は初三郎も去る四月下旬玖磨川の上流市房山の山ふところ湯山温泉に写生旅行の節突として神経痛を激発爾来右肩より右指の自由を失ない一時は筆とる事も箸もつ事も相叶はず五旬の永きを病床に呻吟候が幸ひに漸く快復今後は更らに一層彩管報国に不惜身命の覚悟に候 先は右御無沙汰の御詫びかたがた 旅窓にて 虔具
昭和二十二年七月一日湯の児平野家旅館にて 初三郎
徳富蘇峰先生 御尊下

(注) 封筒表 静岡県熱海温泉 晚晴草堂 徳富蘇峰先生御尊下
封筒裏 熊本県水俣町湯の児温泉平野屋旅館にて 吉田初三郎

川田順 一八八二〜一九六六(明治十五〜昭和四十一) 浅草生まれ。

漢学者川田鸞江の三男。東京帝国大学では当初文科(文学部)に所属し、小泉八雲の薫陶を受けた。八雲の退任を受け「ヘルン先生のいない文科に学ぶことはない」と法科(法学部)に転科したという。住友本社に入社後、昭和十一年に引退するまで第一線の実業人として活躍。その間、佐佐木信綱門下の歌人としても「新古今集」の研究など足跡を残した。戦後は皇太子の作歌指導や歌会始選者をつとめた。昭和二十三年、京都大学経済学部教授・中川与之助夫人で歌人の鈴鹿俊子と恋に落ち、自殺未遂を起したという。老いらくの恋事件は、ジャーナリズムに興味を持って取り上げられた。

川田順は鈴鹿俊子とともに国府津に住み、熱海の蘇峰邸や二宮の塩崎邸をよく訪れていた。

◆展示書簡 絵手紙三通

昭和二十六年八月一日 穂積重遠の逝去を悼んだ歌一首添え

昭和二十七年六月二十三日 御懇書頂戴し恐縮している。

昭和三十三年一月十二日 新年の挨拶で熱海を訪問した際の礼状。

大石順教 一八八八〜一九六八(明治二十一〜昭和四十三)

本名・よね、芸妓名・妻吉。元大阪堀江の芸妓、日本画家、尼僧。明治三十四年、堀江のお茶屋「山梅楼」の芸妓になり「妻吉」と名乗って、その主人である中川萬次郎の養女となる。そこで舞を精進していたが、明治三十八年、養父が刀を振るい、六人を殺傷。世に言う「堀江六人斬り事件」がおきた。順教は命を取り留めたが、両手を失った。昭和二十二年に佛光院を建立。また、長年培われてきた口筆による書画が入選し、晩年までその道を全うした。

展示書簡中のキリギリスも口筆で描かれたもの。

◆展示書簡 昭和二十九年八月二十日付 墨書

秋とは申ながらあつさきびしくおもはれ申候が御さほりもあらせられず御喜び

申上候 此後とに御大切二御祈り申上候 先八御無さ堂をかね残暑お見万
ひ萬で 八月廿日 順教

徳富猪一郎先生

(注)封筒表 熱海市伊豆山 徳富猪一郎先生

封筒裏 京都市東山区山科勸修寺 佛光院 大石順教

池部釣 一八八六〜一九六九(明治十九〜昭和四十四) 東京都生まれ。

東京美術学校(現・東京芸大)卒。明治〜昭和期の洋画家、漫画家。明治四十四年から「京城日報」で、その後は「国民新聞」で挿絵や漫画を担当。昭和四十一年芸術院恩賜賞。子に俳優の池部長がいる。

明治四十四年八月二日付の絵手紙は、大韓帝国初代皇帝・高宗の夫人・嚴妃の葬儀の様子を描いたもの。京城日報の仕事で西大門に滞在していた時のものと思われる。

◆展示書簡 明治四十四年八月二日付 葉書

今日嚴妃の葬儀見物に出掛中 白い衣服の中に赤や黄や黒がチラついたし、美しく感じ申候 小生七日当地出発 上京の豫定にて先生に御目にかかるも 近き内と楽み居り候

(注)葉書表宛先 東京京橋区日吉町国民新聞社 徳富蘇峯先生

差出人 八月二日 西大門 山下釣

愛新覚羅溥儀 一九〇八〜一九六七 北京生まれ

★清朝最後の皇帝(宣統帝)在位 一九〇八〜〇二

★満州国の傀儡皇帝(康德帝)在位 一九三四〜四五

三歳で即位、宣統帝と称した。辛亥革命で退位し、清朝最後の皇帝(宣統帝)となる。日本軍の後ろ盾により一九三四年満州国皇帝(康德帝)となる。一九四五年日本が降伏すると退位、弟・溥傑(ふけつ)とソ連に抑留され、のち戦犯として中国の撫順收容所にはいる。一九五九年特赦で釈放され、北京に住んだ。

📌 宣統御筆と刻された大型の印が目を引く。使用された便箋は黄色の絹本である。黄色は皇帝用の色であった。

書簡は、「清朝が滅んだ辛亥革命から二十年たつが、民衆の生活は苦しくなっている。政治を安定させるために御指導をのぞんでいる。」といった内容。それに対して蘇峰は「自重シテ軽拳盲動セザランコトヲ警告」したと後日述懐している。

◆ 展示書簡 昭和六年九月四日付 絹本に墨書 巻物仕立て

瀧自辛亥蘇政瞬已廿載 水深火熱民 不聊生必何如 貧安東亜極蘇民生

鞏固邦文深望 閣下加以指導茲遣家庭教授遠山猛雄往見諸当面 口此致

蘇峰先生閣下

宣統御筆

辛未九月初四日

伊藤 博文 いとう ひろぶみ 一八四一〜一九〇九(天保十二〜明治四十二) 周防国生まれ。

松下村塾に学び、幕末期の尊王攘夷・倒幕運動に参加。維新後は薩長の藩閥政権内で力を伸ばし、兵庫県知事、岩倉使節団の副使、参議兼工部卿を務め、大日本帝国憲法の起草の中心となる。初代・第五代・第七代・第十代の内閣総理大臣および初代枢密院議長、初代貴族院議長、初代韓国統監を歴任した。明治四十二年ハルビン駅頭で朝鮮独立運動家・安重根に暗殺された。

📌 蘇峰は伊藤の書に特別な感情を持っていた。『我が交友録』のなかで次のように書いている。

「伊藤の書はなかなか変化が多くて、物に応じて形を賦するという有様で、朝鮮に居た頃には、何やら朝鮮人の字らしくあり、支那の法帖を見た時には、またそれらしくあつて、必ずしも一定しないが、しかしその変化の中にも所謂伊藤流なるものは、徹底している。(中略)伊藤の書は何度でも得られると思ひ、何れ適当な折には欲しいものを書いてもらおうと思つていた。(中略)何時も伊藤の書を見る毎に惜しき機会を取り逃したといふことを思はざるを得ない程、伊藤の書には尚ほ興味を感じている。」

揮毫してもらつたチャンスを逸した蘇峰が、悔んでも悔やみきれない感情を抱いていたことがわかる。

◆ 展示書簡 明治三十五年六月二十三日付 墨書

拜啓 益御清適奉賀候 陳は明日午後五時赤坂三河屋に而小集相催候間、御閑職に御坐候は、バ御来卓拔成下度案待候。草々敬具

六月廿三日

博文

徳富猪一郎殿

(注)封筒裏 赤坂区青山南町六丁目三十番地 徳富猪一郎殿

封筒裏 明治三十五年六月廿三日 侯爵伊藤博文

児玉 源太郎 こだま げんたろう 一八五二〜一九〇六(嘉永五〜明治三十九)周防生まれ。

陸軍軍人、政治家。陸軍大将、伯爵。佐賀の乱や神風連の乱、西南戦争に従軍して頭角をあらわす。日露戦争では満州軍総参謀長を勤め、勝利に貢献した。川上操・桂太郎とともに、明治陸軍の三傑と呼ばれ、また能書家としても有名。

◆ 展示書簡 明治三十二年八月十六日付 墨書

拜啓仕候。然れば上京中は毎度御来訪被下奉多謝候 彼之村上之一条も帰任篤と相談致候処、全一時之感情に御座候。固より格別之事も無御坐。愈一層勉強可致事に相決候間、御安心被下度。此場合知事之交送等之事は余り好敷からずと存候際に付、小生に於ても又た本嶋之為めにも可賀事に御坐候。本嶋も又々暴風に会ひ候へ共、本年は昨年にして雨量少なく、且第一期米は收穫後第二期は苗を下したる迄之処で、農作之害は皆無に御坐候間、損害意外に少なく仕合申候。随而民情も至極平穩に御坐候。林季成等之一派多少運動致居候様申居候へ共、是以小生は相信じ不申、併し専ら警或は為致候。警戒之為め少賊を突き出し、世間体は却而騒敷相見候へ共、其実は藪蛇之傾き御坐候。雲林地も気に懸り候間、官吏を派出致取調候処、是以全く憶測之声のみ高く、当分は大事に立至り候形跡は更に無之、安心仕候。右御礼旁近況申述度如此御坐候 謹言 八月十六日


徳富様侍史下 尚々天時御自重為邦家専一奉存候。

源太郎

(注)封筒裏 東京京橋区日吉町国民新聞社 徳富 猪一郎様 封筒裏、台北、児玉源太郎

まつおか ようすけ
松岡 洋右 一八八〇〜一九四六(明治十三〜昭和二十一)山口県生まれ。

外交官、政治家。日本の国際連盟脱退や日独伊三国同盟の締結、日ソ中立条約の締結など第二次世界大戦前夜の日本外交の重要な局面では、常に指導的役割を演じた。敗戦後、極東国際軍事裁判の公判中に病死。

鉛筆書きで便箋十四枚に一気に書かれたもの。赤鉛筆で「極秘御一読後御焼棄請ふ」とある。真珠湾攻撃など緒戦の戦果を「痛快、壮快」と絶賛し、「闘ひ抜ひて勝て」などと強気一辺倒の内容である。松岡はその後、三国同盟が戦争に繋がったことを悔いて「死んでも死にきれない」と泣いたと伝えられ、開戦時当初の高揚した気持ちを表す貴重な資料となっている。

◆ 展示書簡 昭和二十年十二月十日 夕 付 便箋十四枚にペン書き

開戦第一日丈の収穫にても、ど偉い事で、恐らく世界戦史特に海戦史上空前の事でせう。「ル」大統領色を失ふと、傳ふ。左もありません。今日又シンガポールにて英の東洋艦隊主力撃滅、マニラ上陸、マレー上陸、実に痛快、壮快！ 無論戦争はこれからで、十年の覚悟なかるべからず。これ位で除り喜んではならぬが併し緒戦の大々的快報、何と中しても御互に慶せざるを得ませぬ。伊勢大廟を遠く拝せざるを得ませぬ。恐らく英、米の上下を震撼して得せう！ 独と雖フリッツリーグの株を奪はれた感がして得せう。これで日本も独から見ても鼎呂(九鼎大呂)の略。重く尊いもの(の意)の重きをなした。ソ聯も対英米関係に於て、これで牽制出来ると信じます。

極秘御一読後御焼棄請ふ(外交上卑見は一体禁物なれば)

〈注〉右の一行は赤鉛筆で書かれている

- 一、今日ラチオを通じて御講演を拝聴し得ざりし事 返すがえすも残念です。
- 二、何と言つても米・英殊に米に向つて思ひ切つたる宣戦布告の挙に出でたる事により、どうやら大和民族は其世界的使命に堪ゆべく更生の途上に確実に就きしやう感ぜられます。

三、指摘する迄もなく、先生の慧眼、日米交渉顛末公表御一瞥丈にて、如何に日本が愚弄翻弄せられたるか御看取相成りたる事と存じます。凡そ交渉と云ふものは双方(殊に大国の間にては)が一步一步交渉の進むにつれ互譲すべきであるに拘らず。右日米交渉に於ては一步一步、案を修正する毎に米は露骨となり、

段々と、より強硬にして日本に不利なる申立てを行ひ、非禮暴慢を極めた。9
拙者退官以来の経過は生不聞、併し今回の公表を見て生の想像の当り居たりしを知りました。実に言語同断なる讓歩にして若し、米大統領が一と先づ之を承諾したりしならばと想ふと、今でも膚に粟を生じます。併し皇国に天佑がありました。あんな自惚れの強い馬鹿な先生が交渉の相手であつた事が何よりの天佑でした。

〈注〉便箋欄外の書き込み「小生在官終末に近き頃、驚くべき経緯あり。(秘しあり)」しを志士知らば、眦を決せん欺！」。

四、もうどんな馬鹿でもさきが明かとなり(殊に米の腹が見え透いて来て)又私の到底堪えないことが明瞭となつてから、政府部内の或者等は「もうどうに腹はきまつているのだ。唯都合のよい時まで交渉継続で米を釣つてゐるのだ」と宣伝(申訳)した容子なるが、これ丈の腹をホントウに持つて事に當つて貰ひたかりしが、どたん場に迫りてのことは別として、こんな腹は何処にも初からありはしなかつたのです。こんな言ひ訳は虚言です。併し天佑がありました。こついふ言ひ訳が真なりと想はる様な事態に独り手に落ち行きました。『さう落ち行くぞ』と私は本年五月已に予言して置きましたが、それは一つは天佑を信じたからです。

五、併し、それは、今となつてはどうでもよい。過去は一切水に流して、上下一致、この空前の難局に処し、一日も速に上御一人の御軫念を些少なりとも減ずる様努力せねばならぬ。向後尚英米が恋しいやうな人があらば、寸分の仮籍なく処分すべし。此上はもう「喰ふか喰はるか」といふ事が真であります。

六、脇目を振らず向ふ半歳唯闘ふの一事あるのみ、唯是であるのみ。其他は一切顧みず、唯戦へ、唯闘へ、闘ひ抜ひて勝て！ 来年六、七月頃から真の外交戦始まるべし。それまでは外交は不要！ 今日的事早かれ遅かれあるべきは私の十数年来像想(数十年來なれど、稍々具体的となり想や対策を練り始めたる時期を云ふ)し、具體的に戦争終止の時期、方法、要件にも疾く已に胸中自ら成竹があります。後日申上げたいと思ひます。

七、翻つて外交がと言へば、此の半歳、如何なる事を忍びてもソ聯を英米、殊に米と此上接近せしめず、殊にソ聯極東地点を英米に利用せしめざるやう努むべきである。それは、今でも政府はやつて居るらしいが。

八、又独ソの關係は極めて微妙在之候不絶周密なる注意を払はねばなりません。従つて独に対して此上の不信を働いてはならぬ。尤も今度の快拳で独国民の対日不信の感情は余程緩和したと観測致します。特に微妙を極むる日独の關係、対ソ關係等は紙筆になすを不許、何れ後日口頭申上げます。

九、実は私は、今春以来陸相に向つては「支那事変が決して単独の問題として片付

くものならざる事は予の持論なるが、最早何人にもそれは判つて来たらう。今に日本も真に世界戦争に乗り込まねばならぬので、支那事変なるものは、此時消えるのだ。唯世界戦争参加者たる日本としての大局に立ちて、支那の如何なる地域を如何なる方法又は形に於て、如何なる程度まで占拠せねばならぬかといふ様に考へ直し、我陣容をこの見地に倚りて、立て直さねばならぬ。それには重慶も蒋介石も何も無いのだ」と内話し真剣なる注意を惹いて置いたのであります。一日東條陸相も同感の意を表したのであります。今や事態は此問題、此考へ方を現実要求 circumstances して居ります。

〈注〉()内の英語 circumstances は上から波線で消されている。事態の状況という意味を英語で書こうとしたものか。

十、東條首相を褒めてやつて下さい。(兎も角こゝまで漕ぎ付けた事は偉い)そして助けてやつて下さい。

十一、一昨日以来上御一人の御軫念の程を乍陰恐察、病室に晏如として居られず、医師等には秘密に、家人は叱り付けて、昨日天機奉伺記帳の為(禁を破りて)宮中玄関迄伺候して参りました。序に、奥に這入り、木戸内府に面会して記帳の為罷出でたる事を告げてをきました。国務とは申しながら、余りにも自分の身体を虐使して之を損じ、空前の此の秋、何の御役にも立ち得ざる事、真に陛下に申訳なき儀に存じて居ります。区々の表情御憐察を仰ぎます。併し前述の通り半歳は大丈夫御用はない、兵隊の分野だと思ひます。

十二月十日夕

乱筆御判読奉仰候

洋右

〈注〉封筒なし。鉛筆書き。便籥一四枚。

中曾根 康弘 なかそね やすひろ 一九一八(大正七) 群馬県高崎市生まれ。

衆議院議員連続二十回当選(一九四七〜二〇〇三)。

内務省、大日本帝国海軍を経て、内務省に再勤。退官後、衆議院議員選挙に立候補。中曾根派を形成するなど自由民主党内で頭角を現し、科学技術庁長官をはじめとして運輸大臣、防衛庁長官、通商産業大臣、行政管理庁長官などの閣僚経験を経て、一九八二(昭和五七)年、内閣総理大臣となる。現在では最年長

の首相経験者となっている。

中曾根氏は、昭和二十二年頃から熱海・晚晴草堂の蘇峰のもとをたびたび訪ねた。蘇峰は中曾根氏に「志在天下」(志天下に在り)という書を贈っている。書簡では「稚き芽も四度の霜に耐へにけり」と、四回目の当選を果たした感慨を歌に詠んでおり、中曾根氏も自著「天地有情」(文芸春秋刊)の中で、この手紙について回想している。

◆ 展示書簡 昭和二十八年六月二日付 墨書

拝啓 先生の御健康と御大著の御完成を奉祝いたします。六月三日の歴史的御講演を待つています。

稚き芽も四度の霜に耐へにけり

六月二日 中曾根康弘

〈注〉封筒表 静岡県熱海伊豆山 徳富先生

封筒裏 千代田区富士見町二の五 議員宿舍 中曾根康弘

小泉 又次郎 こいずみ またじろう 一八九六〜一九五一(慶応元)昭和二十六)横浜市生まれ。政治家。小泉純一郎氏(元・内閣総理大臣)の祖父であり、小泉進次郎衆議院議員の曾祖父。横須賀市長、通信大臣、衆議院副議長などを歴任した。義侠心のある大衆政治家で入れ墨があつたことから「いれずみ大臣」「いれずみの又さん」などの異名をとつた。

◆ 展示書簡 昭和 年月 日付 墨書

拝啓 聖徳太子殿堂建立の件に付き高橋鼎氏を御紹介之為 寸時御割 ●御引見之栄を賜り度伺貴意致候 敬具

二月九日 小泉又次郎

徳富先生 机下

〈注〉封筒表 民友社 徳富先生 高橋氏持参

封筒裏 淀橋区西大久保二〜三四二 小泉又次郎

高崎 正風 一八三六〜一九二二(天保七〜明治四十五) 薩摩出身。

歌人。鹿児島藩士・高崎温恭の長男。父はお由羅騒動といわれる藩の内紛のために切腹、正風は流島となるが、のち許されて鹿児島に戻り、以後国事に奔走した。明治四年新政府に出仕。二十二年に宮中顧問官、二十八年に枢密顧問官を歴任。また御歌所初代所長として、明治天皇の歌を点した。温雅流麗な歌風と能筆で知られる。初代国学院院長。

◆ 展示書簡 明治三十二年八月十六日付 墨書

「禁庭菊」

もろこしの海にくぬかにかをるなり

おほうちやまの 幾久のしたかぜ

〈注〉 封筒表 東京々橋区日吉町四国民新聞社 徳富猪一郎殿 親展

封筒裏 十月廿九日 相模国三浦郡葉山村字堀内 高崎正風

原三溪 一八六八〜一九三九(慶応四〜昭和十四) 岐阜県生まれ。

本名・富太郎。明治・大正・昭和期の実業家、美術収集家。旧姓青木。明治・大正・昭和期の実業家、美術収集家。旧姓青木。東京専門学校(早稲田大学)で政治・経済学を学び、跡見女学校の教師をつとめた。明治二十五年横浜の豪商・原善三郎の孫・屋寿と結婚し、原家の家督を継ぐ。富岡製糸場ほか製糸工場を各地に持ち、製糸家としても知られた。大正九年横浜興信銀行(現横浜銀行)の頭取になる。明治三十年頃より古美術の収集を始め、国宝級の古美術から重要文化財を含む古建築まで収集。横浜本牧に「三溪園」を作り、公開した。美術品の収集家として知られ、速水御舟、安田靉彦、前田青邨らを物心両面にわたり援助した。岡倉天心とも交友し、自らも余技に絵を描き、晩年茶人として知られた。関東大震災後は横浜市復興会の会長に就任した。

原三溪が蘇峰に『臨春閣』の揮毫を頼んだ際の礼状。三溪園内に大正六年移築された『臨春閣』は蘇峰による銘である。

◆ 展示書簡 昭和十二年九月二十二日付 墨書

秋気爽涼先生筆硯佳御清安泰恭賀候昨日八兼てより鶴首仕居候臨春閣額面

野村君を通して御惠贈被成下拜手仕候養古志勁一嘘雲を吐くの概呈にて御常鱗凡介の企及する處二八無之敬服感喜仕候 此ハ水額に彫刻し臨春閣と共に水く保存可仕厚く御礼中上候扱先生御著述も益々順境二進行 被遊慶賀此事二御座候小生も過般迄二一度八通読仕候得共老来記臆消耗仕候為め今一回通読仕度昨今相始め居中候 国民史御完了の上八更二推古朝以後の歴史御執筆被下候得バ国民ノ幸慶此とも無之事に奉存候 先生ノ御長寿御健康を衷心より祈り居中候果又過般鈴木煙洲先生より先生之御撰文を書すべく何故か書二得ざる小生二強命有之聊当惑仕候得共他の意味に於て無止執筆仕候 昨今先生之御揮毫を拝して蜻蛉遙二老龍を望むの感有之今更慧愧二堪不中候 何卒御寛恕奉願上候 不取敢御礼迄申述候

早々敬具 九月二十二日

原言疾

徳富蘇峯先生 玉案

〈注〉封筒表 山梨県山中湖旭ヶ岡 徳富蘇峯先生 玉案

封筒裏 九月廿二日 横浜市本牧町 原三溪

中村 不折 一八六六〜一九三九(慶応二〜昭和十八) 東京生まれ。

洋画家、書家。本名鈞太郎。青少年期を長野で過ごし、明治三十年上京。高橋是清の館に住み、浅井忠や小山正太郎らに師事し洋画を学ぶ。正岡子規とともに陸羯南の日本新聞社の記者として日清戦争に従軍。中国の書に興味を持った。明治三十四年から四年間フランスへ留学。歴史画の伝統的な手法を修得した。夏目漱石や森鷗外とも親しく、岩波書店の『吾輩は猫である』『若菜集』などの挿絵や題字、また森林太郎(鷗外)の墓碑銘を手掛けた。昭和十一年には書道博物館を台東区根岸の旧宅跡に開館。不折の筆跡は現在でも宮坂醸造の清酒「真澄」や新宿中村屋の屋号などに残されている。

◆ 展示書簡 昭和二年三月二十九日付 墨書

炎暑之砌益御勇奮奉賀候 偕此手紙持参之もの八大二奉仕する写真技師島畑孝治氏ニテ業務之暇小生所蔵之古書複製制度由已二両三回八出来候 御目にかげ度且つ又普及之方法二付き御高見同度由忝御迷惑二候得共御引見被下度□□拜首之時を斯候 草々頓首 中村不折


徳富先生 侍史

(注)封筒表 徳富蘇峰先生 島畑氏持参

封筒裏 上根岸町一二五 中村不折

比田井 天来 一八七二〜一九三九(明治五〜昭和十四) 長野生まれ。

本名・鴻。「現代書道の父」と呼ばれる。古碑法帖を多角的に研究し、古典臨書の新分野を開拓した。弟子には多くの古碑帖を自ら学ぶことが重要と教え、自分の字を真似しないように指導し手本を書かなかった。そこで学んだ弟子達は、自身の学書によって自らの書風を確立し、その結果、前衛書や少字数書、詩文書等が生まれた。昭和十二年に大日本書道院を設立。喜多方の銘酒「会津ほまれ」は天来の筆によるもの。

 鮮やかな濃ピンク色の料紙で「田辺松坡氏よりお願いした件では、御面倒をおかけいたしました。その内、機会を見てお目にかかりに伺います」といった内容の手紙

◆展示書簡 大正七年七月二十二日付 墨書

拝啓 未得拝晤候處益御清昌奉賀候 此間田辺松坡氏より願上置候件二付
得拝顔度此頃上京中二数々罷出候處 難懸御目遺憾之至二奉存候 其内機
会有之自然拝晤相叶候ハバ奉願度 右御先容迄得貴意置候 敬具

七月二二日

比田井 鴻


蘇峯先生

(注)封筒表 東京青山南町六丁目 徳富蘇峯先生 執事
封筒裏 相州鎌倉建長寺正統庵 比田井 鴻

日下部 鳴鶴 一八三二〜一九二二(天保九〜大正十一) 彦根出身。

本名・東作。中林梧竹、巖谷一六と共に「明治の三筆」と呼ばれ、また「近代書道の父」と崇められた。中国、特に六朝書の影響を受けた力強い筆跡が特徴であり、それまでの和様から唐様に日本の書法の基準を作り変えた。加えて数多くの弟子

を育成し、現在でも彼の流派を受け継ぐ書道家は極めて多いと評される。鳴鶴12の流派は鶴門と呼ばれ、その門下生は3千人を数えた。揮毫した碑は全国で千基とも言われる。中でも「大久保公神道碑」は鳴鶴の最高傑作とされる。日本酒「月桂冠」の銘は日下部東作の筆による。

 大正六年の寿筵(誕生日)の会に対する礼状で、「老後之快事」であったと伝えている。

◆展示書簡 大正六年五月十五日付 墨書

謹啓 夏景冲澹之候 益御清祥奉賀候 陳ハ今回老拙寿筵之節ハ厚キ御同情
ヲ辱シ御陰ヲ以テ意外ナル盛況ヲ呈シ老後之快事不遇之拙者及會幹一同難有
御禮申上候 勿々敬具
五月十五日 日下部東作
徳富蘇峯様

(注) 封筒表 青山南町六丁目卅 徳富蘇峯様 親展
封筒裏 南町五丁目四五 日下部東作

参考文献

- 『蘇峰とその時代』高野静子著 中央公論社 昭和63年
- 『続・蘇峰とその時代』高野静子著 徳富蘇峰記念館 平成14年
- 『コンサイス日本人名事典(第4版)』(株)三省堂 平成13年
- 『大人名事典』平凡社 昭和28年